

あとがきに代えて

芹 沢 寿 良

妻茂登子は、病院でも自宅でも、常に病床の枕元に小さな鉛筆を挟んだ手帳やノートを置いていましたが、身体を横たえて短歌づくりに耽っている時、よく浮腫んだ指を折って数えていました。そんな姿を思い出すと目頭に涙が滲んできます。故人は最初の入院経験をまとめた一九九三年の著書『病院はおもしろい』の末尾に「……入院中にわか歌人になって、その後ブツンとなくなってしまった短歌づくりも女学校の同級生のHさんやTさんのお誘いを受けて、短歌の会に入れていただくことになった。これもご縁と思い、末長く続けていきたいと思う」と書いていましたが、以来、短歌づくりを生きている証しの一つとして「サキクサ短歌会」竹の香支部の会員として皆さんとご一緒に亡くなるまでの六年間短歌づくりを学び続けてきました。

一九九七年夏からの闘病生活を綴ったノートにも「五年前の入院がきっかけになってお仲間に入れていただいた短歌。女学校の同級生の竹の香支部に入れていただいて短歌をつ

くるようになってよかった。何もできない時、短歌をつくる。それが生活の大切な一片一片となつている。そして「サキクサ」誌に「女性の短歌から見た昭和と戦争」の連載を書かせていただくことにもなり、諸資料を調べながら今それにとりこんでいる。今回も入院前になんとか書いて送ったが、諦めずにやりつづけたと思う」（一九九七年七月十三日）と書いていました。

この連載関係の諸資料の収集につきましては、私も公立図書館等に出かけて、故人が指定した古い新聞のマイクロフィルムを読んで、プリントし、また戦前の婦人雑誌の短歌欄をコピーするなどして協力してきましたが、故人がこの仕事を継続していく上でどうしても手元に揃えて利用したいと言っていた「昭和万葉集」全巻を私が何日もかけてあちこちの古本屋を廻って破格に安い値段で手に入れた時、「やっぱりお父さんは、古本探しは名人ねー、うれしい」と大喜びしていたことが、つい昨日のことのように思い出されます。

一九九八年八月、亡くなる一カ月ほど前に、「退院して約三カ月、身体の回復は思ったほどには回復していない、歩行困難、背中が痛むというかなり重篤な身体状況」下で、いろいろ悩みながら仕上げた膠原病と骨粗鬆症との闘病記のなかに「今、思うこと」をいくつかあげ、その一つとして「短歌をつくるよろこび」を次のように書いています。

「一九九二年、初めて病気で入院したとき、入会させていただいた「サキクサ」（大塚布

見子先生主宰)の月刊誌「サキクサ」には、毎月十二首をつくって送っている。また、「女性の短歌から見た昭和と戦争」というタイトルで毎号連載原稿を書き、これも欠かさず連載されている。病中、つらいときも、期日までに提稿しなければ」という気持ちだが却って励みになってきた。今後もつづけ一冊にまとめたいと思っている」そして、最後に次のような短歌四首が書かれていました。ご紹介しておきます。

杖なしに近くの道を歩きゐて喜びてゐる夢を見てをり

川沿ひの道を杖なく歩きゐてふしぎと思へば夢さめにけり

さまざまな薬飲みゐて味のなく箸をつけつつ気落ちしており

もやもやとしたる頭の不快にて寝る時のくるをひたすら待ちぬ

当初、追憶集「人生交響楽・追憶 芹沢茂登子」に、「サキクサ」誌に掲載されました。全ての短歌四五八首と「女性の短歌から見た昭和と戦争」その他の作品を収めることを考えましたが、これらは別の形で遺す方がよいのではないかと考えるようになり、その後遺品整理のなかで出てきました俳句とその関係の文章をあわせまして「臥しゐても 芹沢茂登子歌集」とさせていただきました。このタイトルとしたのは、いくつも案が浮かびましたが、故人の短歌づくりが闘病にはじまり闘病におわって、したがって絶詠を含めて病床詠が多くなっていることを考慮したからであります。

故人は、ダイヤル・サービスで「赤ちゃん一〇番」のカウンセラーの仕事に就いてから、まもなく職場で俳句をつくるサークル活動をおこなっており、その時の故人を含めた皆さんの作品を記入した一冊のノートが発見されました。また、故人が十年程前にもある句会に参加して、「趣きの深い句会」に感動した時のことを書いた文章が別のノートに遺されていました。

編集にあたりましては、濱口喜久子さんと坂口 郁さんに特別のご協力をいただきました。濱口さんは、「サキクサ短歌会」の同人で、故人の女学校以来の五十年を越す親しい友人であり、坂口さんは、戦後、同じ時期にすれ違いに故人が転出した大阪の女学校に転入し、故人は坂口さんが転出した東京の女学校に転入し、大阪での担任は兩人とも同じ先生であったという偶然が重なり、それから半世紀近く経過して、「サキクサ短歌会」の会員として再び顔を合わせ、また、二人がそれぞれほぼ同じ頃に戦時下の女学生生活の記録をまとめる仕事をしていたという縁の糸で結ばれていた友人であります。こうしたことから「サキクサ」誌の故人の短歌についてのコメントを濱口さんをお願いし、「女性の短歌から見た昭和と戦争」と「大原富枝と『婉』の足跡を訪ねて、そして短歌のことども」についてのコメントは坂口さんをお願いしてお引き受けいただきました。お二人には、また歌集を単行本とすることについても、細々としたことまでいろいろとご相談に乗っていた

いただきました。心より厚く御礼申し上げます。

故人のこうした分野の活動について、関係者の方々から「文章も、歌も平明そのもので、歌を大切に思っている」とか、女性の短歌と戦争についての連載は「貴重な仕事」と評価されましたことを大変嬉しく思うとともに、私自身も故人のことをもつと深く知るためにも、この歌集から少しずつ歌の勉強をしていきたいと思っております。

サキクサ短歌会の大塚布見子先生をはじめ、竹の香支部の皆様には故人が晩年生きがいのひとつとしていた短歌の勉強でいろいろとご指導をいただきました。最後に、このことに対しまして、故人の連合いとしてあらためて深く感謝申し上げます。